

4回目 全員接種を転換

60歳以上・基礎疾患ある人が対象

新型コロナウイルスワクチンの4回目接種について、厚生労働省の分科会が27日開かれ、接種対象を重症化リスクが高い人に絞って始める厚労省の提案を了承した。60歳以上の人と、18歳以上でBMI（体格指

数）が30以上の肥満の人、基礎疾患がある人が対象となる。60歳未満の人は多くが対象外となり、従来の5歳以上の「全員接種」から大きな転換となる。

▼2面|| 感染拡大時の対応案、3面|| 重症化予防に重点、26面|| 自宅死555人

政府は3回目の接種までは、重症化を予防するためだけでなく、社会全体の感染者数を抑えることをめざし、幅広い年代に接種を促してきた。4回目では、今のところ60歳以上の重症化を

防ぐ効果しか明確なデータはなく、ワクチン施策を大幅に見直すことになった。4回目接種が進むイスラエルで、ファイザー社製のワクチンを打った60歳以上では重症化を防ぐ効果が6週間後も3回目と比べて77%あったという報告がある。こうしたデータから、この日議論された厚労省案では、4回目接種の目的を重症化予防に限定した。

60歳未満への有効性を示す知見は十分に得られていないが、肥満の人や基礎疾患がある人は重症化リスクが高いため、対象に含めた。接種を強く呼びかける予防接種法上の「努力義務」は適用しない。自治体がこうした人を特定して接種券を配ることは難しく、どのように進めるか、厚労省が自治体と検討する。

出席した専門家から異論はなかったが、これから得られる有効性についての知見や感染状況によっては、医療従事者を対象に含めた

り、対象年齢を広げたりすることを求める意見が出た。4回目接種では、米ファイザー社製と米モデルナ社製のワクチンを使う。早ければ6月末から始める。

分科会では19日に承認した米ノババックス社製のワクチンについて、公費で1〜3回目の接種に使うことを認めた。2回目までに別のワクチンを打ち、3回目にノバ社製を打つ「交互接種」もできる。（枝松佑樹）

◇

ワクチン 重症化予防に重点

新型コロナウイルスワクチンの4回目接種は、重症化リスクが高い人に対象を絞って始めることになった。コロナ対策の中心となってきたワクチン接種が、5歳以上の「全員接種」から大きく変わるようになる。なぜなのか、新型コロナに「これからどう向き合っていくか」になるのか。

▼1面参照

4回目接種 少ないデータ 判断苦慮

27日に厚生労働省で開かれた分科会では、4回目接種の目的を重症化予防に置き、対象は60歳以上と、18歳以上の基礎疾患がある人に限定する厚労省案で専門家の意見もまとまった。出席者からは「数カ月しか効果がなく発症予防のためには打って」とは言えな「と」の意見が出た。

一方、「60歳未満で基礎疾患がなくとも、打ちたい人はいる」「医療や介護の従事者は、少しでも効果があつたら打ちたい」という声もあつた。ワクチンの有効

性について新たな知見が出た。海外ではイスラエル、米

かという点だった。海外ではイスラエル、米

果が著るうえ、重症化を

またに悩ましいのが、若

厚労省は当初、若年層にも接種券を配り、接種を推奨する度合いで高齢者らと差をつける方法を模索した。基礎疾患がある若い人を自治体が特定して接種券を配ることは難しいため、3回目を打った全員に配った方が事務の上でも簡単だ

接種対象者にとつてワクチンの効果は依然として大きい。インフルエンザに対するタミフルのように、幅広く使える薬がまだない中で、高齢者を重症化から守る効果は引き続き期待できる。ただ、「全員接種」からの転換は、ワクチンを中心に進められてきたコロナ対策全体にも影響がありそうだ。

今回の結論で、基礎疾患がある60歳未満の人には、接種券が配られないという問題が残った。分科会では自治体関係の委員から「どうやって周知するか、市町村にとっては最大の課題だ」との指摘が出た。

は、接種が進んだ影響が大きいとの専門家の指摘もある。これからはこうした効果が期待できなくなり、ワクチンを打っていることを条件に、飲食店を利用する人数や時間の制限を緩和する政策も、前提が崩れることになる。

後の対策について、政府はまた明確な答えを示せていない。ワクチン確保のあり方も問われる。政府はこれまで2兆4千億円を投じ、8億8200万回分のワクチンを確保してきた。4回目のためにすでに1億4500万回分を購入しているが、対象は絞られることになった。人口を大きく上回る量の調達を続けるべきか、考

これまでの国内のワクチン接種状況
25日時点。首相官邸の資料などから、接種率は接種済み人数を対象人数で割った数値

接種	対象	人数	接種済み	接種率	ワクチン確保量
1,2回目 開始時期は 2021年 2月～	5～11歳	740万人	51万人 2回目接種完了	7%	3億6400万回分
3回目 21年 12月～	12歳以上	1億1461万人	9966万人 2回目接種完了	87%	3億7300万回分
4回目 22年 5月?～	60歳以上 基礎疾患がある人	4318万人	?	?	1億4500万回分

これまでのワクチンは一人ひとりの感染や重症化を防ぐだけでなく、地域の感染全体を抑えるという意図も大きかった。特に活動量が多い若者の間で感染が広がって流行の波が始まる「ことが多く、接種が積極的に行われてきた。昨夏の「第5波」で急速に感染者が減ったの

「必要な人には接種の機会を」

今回対象外となった人は、自費でも接種を受けられる機会はない。ワクチンに詳しい北里大学大村智恵研究員の中山英夫・特任教授は「病院や高齢者施設で働く人が接種を求め、打てる機会を設けてもよいのではないかと話す。ただ、基礎疾患がなく、仕事の上で接種の必要がない人は、3回目までの接種で基礎的な免疫がつけられるため、全員が4回目を打つ必要はない」という。今後はどうなるのか。中山さんは「季節性インフルエンザのワクチンと同様に、高齢者以外には自費で接種を受けるようになるのではないかとみえる。」「4回目以降（同じワクチンを繰り返し打つ意味は小さくなってきている。新たな変異株に対応したワクチンの開発が進んでおり、戦略を考えていくことが必要だ」(野口順天)